

O-16. 2 型糖尿病患者における尿中 L-FABP の腎・心血管予後の予測因子としての有用性

滋賀医科大学 糖尿病・腎臓・神経内科 1)、

旭川医科大学 内科学講座 病態代謝内科学分野 2)、

金沢医科大学 糖尿病・内分泌内科学 3)、

聖マリアンナ医科大学 腎臓・高血圧内科 4)

○荒木信一 1)、羽田勝計 2)、古家大祐 3)、菅谷 健 4)、柏木厚典 1)、宇津 貴 1)、前川 聡 1)

1996–2000 年に滋賀医科大学経過観察研究に登録され、血清クレアチニン値 **1.0mg/dl** 以下で顕性蛋白尿を認めない **2 型糖尿病患者 618 症例**を対象に、尿中 **L-FABP** 値を測定し **2011 年末**まで経過観察をおこなった。平均 **12 年間**の観察期間で **103 症例**が腎・心複合イベント（透析療法導入・心筋梗塞・狭心症・脳卒中・閉塞性動脈硬化症）を発症した。イベント累積発症率は、尿中 **L-FABP** 値の増加に従い上昇し、**3 分位高値群**で補正相対リスクが **1.93 (95% CI: 1.13-3.29)**であった。第二評価項目（心血管イベント、**50%eGFR** 低下、**CKD** ステージ **4 期**への進行、平均年間 **eGFR** 低下率）も、尿中 **L-FABP3 分位高値群**で発症リスクの増加と平均年間 **eGFR** 低下率の増大が認められた。正常アルブミン尿期においても尿中 **L-FABP3 分位高値群**で腎・心複合イベント発症のリスクが高値であった。尿中 **L-FABP** 値は、**2 型糖尿病患者**の腎機能低下、心血管イベント発症の予測因子として有用である可能性が示唆される。

(抄録集掲載)